

絵カードは直接法での語彙導入でどの程度使用可能か

荻原 廣

1. はじめに

拙論「研究ノート日本語教育における初級語彙導入用動画教材の開発に関する基礎的研究」で、現在、初級の語彙導入に使われている絵カードは、直接法(Ⅰ)での授業の語彙導入において使用に堪えうるかについて『みんなの日本語初級Ⅰ』の絵教材(320 枚の絵カードからなる。一部Ⅱと共通の絵カードもあり。)を使って考察した。

ただ、これはデータに基づかない個人的見解であったため、あらためて客観的にこれらの絵カードが直接法(Ⅰ)での授業の語彙導入においてどこまで使用に堪えうるかを、日本語教育に関する講義を受けたことのない、つまり絵カードの知識が全くないと思われる日本人の大学 1 回生を対象にその絵カードが表す単語が何かを書かせる調査をした。

2. 調査

日時：2013 年 7 月 11 日

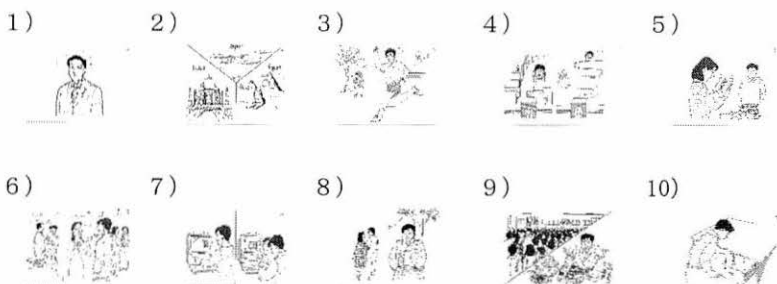
対象：佛教大学文学部日本文学科「日本文学初学び」(1 回生対象)受講生

調査方法：A4 用紙に、絵カードを縮小したものを 20 枚貼り、下に設けた空欄に、その絵カードが表す単語を書かせた。その際、動詞は「～ます」の形で、形容詞と形容動詞は終止形で書くよう指示した。

有効枚数：125 枚回収。そのうち、英語で書かれたもの、指定欄外に書かれたもの、各 1 枚を除いた 123 枚。

3. 形容詞、形容動詞の絵カード

拙論（2012）「研究ノート日本語教育における初級語彙導入用動画教材の開発に関する基礎的研究」で取り上げた 10 枚の絵カードのうち、「かだらにいい・わるい」は、品詞（形容詞）として質問するには不適切であると考え、「大切に」と差し替えた。



以下、順に調査結果について考察する。なお、誤答の数が 1 のもの、及び、品詞を間違えたり、文で答えたりするなど指示とは違うものについては、ここでは考察から省く。

- 1) 正解は「ハンサムだ」で正答数は 1、正答率は 0.8% だった。では、以下に誤答のうち、数が多かったものから順に挙げる。() は誤答の数である。
(以下同様)

かっこいい(55) きれいだ(20) まぶしい(4) えらい(3) 清潔だ(3)
明るい(3) 輝かしい(2) さわやかだ(2) りりしい(2)

これを見ると、「ハンサム」と答えた数が 1 と少なかったにもかかわらず、それに近い解答は「かっこいい」のみだった。つまり、半数以上の学生は、男性の美醜を表す絵カードとすらとらえていないということがわかる。

なお、「ハンサム」との答えが 1 なのに対し、「かっこいい」との答えが 55 もあるのは、この類義表現 2 つのうち、少なくとも大学生の間では「ハンサム」は使われていないことがわかる。つまり、語として「ハンサム」は死語

なのではないかとも考えられる。

2) 正解は「有名だ」で正答数は17、正答率は13.8%だった。

大きい(13) きれいだ(9) すごい(7) 美しい(6) すばらしい(6)
様々だ(5) 高い(4) 暑い(3) 遠い(3) 広い(3) いろいろだ(2)
珍しい(2)

これを見ると、「有名だ」と言う単語に近い答えは誤答の中に全くなかったことがわかる。そうすると、正答率が13.8%なので、ほとんどの人に、絵カードの意味するところが伝わらなかったことになる。なお、もっとも多かった答えは、無答で22名だった。

3) 正解は「元気だ」で正答数は48、正答率は39.0%だった。

寒い(40) 暑い(7) はやい(4) 速い(3) さわやかだ(3) 熱い(2)

「元気だ」と言う単語に近い答えは、「活発だ」と答えた学生が1名いた以外はなかった。ということは、半数以上の学生に、絵カードの意味するところが伝わらなかったことになる。

なお、正答数(48)とほぼ同数の学生が、温度を表す絵カードと捉えている。これは、冬なのに半そで半ズボンから「寒い」(40)、逆に、汗をかいているから「暑い」(7)ということなのだろう。つまり、絵カードのどこに注目するかで、伝わる意味が変わってしまったのである。ただ、この絵カードはまだ8課の段階で出てくるので、補足説明も難しく、あとはジェスチャーを織り交ぜて伝わるかであろう。

4) 正解は「便利だ・不便だ」で正答数は3、正答率は2.4%だった。なお、ここは、対義関係の2つの語が並んでいるが、どちらか一方が正しければ正答とした。(ただし、1つしか答えていなかったものは除いた)

近い・遠い(93) 遠い・近い(4) 近い・遠くだ(2)

これを見ると、「便利だ・不便だ」と言う単語に近い答えはなく、絵カードの意味するところは伝わらなかったと考えられる。なお、誤答だった人の多くは、距離に関係のある語だと誤解している。

5) 正解は「すてきだ」で正答数は1、正答率は0.8%だった。

うれしい(94) すごい(4) 楽しい(3) 新しい(2)

3/4 の学生が「うれしい」と答えている。つまり、プレゼントに対する感想ではなく、プレゼントをもらった感想を表す絵カードと誤解されて伝わっているわけである。確かに「あ、時計ですね。うれしいです。」「あ、時計ですね。すてきです。」とどちらとも取れ、誤解されやすい。正解者はわずかに1名でもあり、最もわかりにくい絵カードの1つに挙げられる。

6) 正解は「楽しい」で正答数は96、正答率は78%だった。

優雅だ(6) 和やかだ(2) きれいだ(2)

今回取り上げた形容詞の絵カードのうち、最も意味が通じた絵カードが「楽しい」だった。しかし、それでも、無答の10名を含めて、2割以上が正しく答えられなかった。

7) 正解は「簡単だ・複雑だ」で正答数は49、正答率は39.8%だった。なお、ここも、対義関係の2つの語が並んでいるが、どちらか一方が正しければ正答とした。(ただし、1つしか答えていなかったものは除いた)

やさしい・難しい(19) うまい・へただ(2) 暇だ・忙しい 上手だ・

下手だ

これを見ると、「簡単だ・複雑だ」と言う単語に近い「やさしい・難しい」との答えが 19 あったため、絵カードの概念が伝わったものは 68 名と考えられ、半数程度は伝わったと言える。なお、正解は「簡単だ・複雑だ」で正答数は 49 としたが、この中には「簡単だ・難しい」も多く含まれる。となると、特に「複雑だ」と「難しい」との違いが、伝わっていないと言えるだろう。

8) 正解は「さびしい」で正答数は 46、正答率は 37.4%だった。なお、「さみしい」も正答とした。

悲しい(33) 切ない(14) 辛い(6) 寒い(5) 残念だ(2)

これを見ると、「さびしい」と言う単語に近い答えは「悲しい」「切ない」「辛い」「残念だ」を合わせると 55 となり、「さびしい」を上回る。このように、この絵カードは、さまざまな語に理解される可能性があることがわかる。

9) 正解は「すごい」で正答数は 2、正答率は 1.6%だった。

多い(59) たくさんだ(12) いっぱいだ(8) おいしい(4) 豪華だ(3)
にぎやかだ(3) うれしい(2)

「すてきだ」と並んで、最も意味が伝わりにくかった絵カードといえよう。「ハンサムだ」(正答数 1) より正答数は多いが、「ハンサムだ」は「かっこいい」との類義語の答えが 55 もあった。しかし、ここは「多い」「たくさんだ」「いっぱいだ」と数量に関する語と捉えたものが圧倒的に多く、概念すら伝わらなかったことになる。

10) 正解は「大切だ」で正答数は 15、正答率は 12.2%だった。

大事だ(4) 悪い(4) 必要だ(3) 安全だ(3) 安心だ(2) 重要だ(2)
ずるい(2) きびしい(2) めんど(う)くさい(2) ましい(2) 嚴重だ
(2) まじめだ(2)

このように、少数意見が並んでいる。というのも、最も多かったのが、「無答」で 50 名もいたからだ。つまり、この絵カードが何を表しているのかが難しすぎて伝わりにくいということがよくわかる。

4. 動詞の絵カード

以下、順に調査結果について考察する。なお、誤答の数が 1 のもの、及び、品詞を間違えたり、文で答えたりするなど指示とは違うものについては、ここでは考察から省く。

1)



2)



3)



4)



5)



6)



7)



8)



9)



10)



1) 正解は「習います」で正答数 2 は、正答率は 1.6%だった。以下、誤答のうち、数が多かったものから順に挙げる。() は誤答の数である。

教えます(82) 勉強します(12) 聞きます(9) 学びます(7) 話します(2)

これを見ると、「習います」と答えた数が2なのに対し、「教えます」は82と、学習者の絵の方に○がついているにもかかわらず、それが伝わっていない現実が窺える。なお、「習います」に近い概念「勉強します」「学びます」もあったが、どちらも「習います」より回答数が多かった。ただ、絵カードで導入の際、学習者の絵を指差し、注意を向けてやれば、もう少し誤答は減ったかもしれない。しかし、その場合は「勉強します」「学びます」がもっと増えていた可能性がある。

2) 正解は「います」で正答数は5、正答率は4.1%だった。

笑います(72) 集まります(9) 撮ります(5) 並びます(5) 撮影します(2)

これを見ると、「笑います」が圧倒的に多い。ほかにも笑顔から「撮ります」「撮影します」と想像力を働かせた答えが7あった。

3) 正解は「急ぎます」で正答数は67、正答率は54.4%だった。

走ります(32) 遅れます(16) 遅刻します(4) あせります(2)

正答が半数を超えていたが、しかし、「急ぎます」から「走ります」、「遅れます」から「急ぎます」、「遅刻します」から「急ぎます」、「あせります」から「急ぎます」と因果関係で捉えている学生もかなりの数いる。導入時の説明である程度誤解は防げるかもしれないが、それでも「急ぎます」と「走ります」の違いを、この段階で説明しきれんだろうか。

4) 正解は「教えます」で正答数34は、正答率は27.6%だった。

伝えます(21) 説明します(15) 話します(13) 言います(6) 書きます(3) 探します(3) 住みます(3) 尋ねます(2)

これを見ると、男性が女性に家の住所と電話番号を教えている場面も、「住所と電話番号を伝える」とも言えるし、「住所と電話番号を言う」とも言える。また、自分について説明したり、自分について話したりなどとも言えなくもない。1つの場面で、このようにさまざまな単語が導き出されてしまう絵カードと言える。

5) 正解は「始めます」で正答数は7、正答率は5.7%だった。

話します(40) 話し合います(36) 会議(を)します(16) 説明します
(3) 聞きます(2) しゃべります(2)

ホワイトボードの「Meeting1:00～」と時計の絵の1時から「始めます」を連想させようという意図なのかもしれないが、「Meeting1:00～」と英語を使っている時点で直接法での導入とは言えなくなる。ただ、「Meeting1:00～」からくる連想より、もっとダイレクトに「Meeting」している場面と伝わったようで、結果として、「話します」「話し合います」「会議(を)します」と多くの誤答を呼んだように見える。

6) 正解は「使います」で正答数は27、正答率は22.0%だった。

調べます(23) 遊びます(13) 操作します(8) ゲーム(を)します(6)
パソコン(を)します(6) 見ます(5) します(3) 作業します(2) 操
ります(2)

「(パソコンを)使います」が正答だが、誤答を見ると、「(パソコンで)調べます」「(パソコンで)遊びます」「(パソコンを)操作します」「(パソコンで)ゲーム(を)します」「パソコン(を)します」「(パソコンで)動画(を)見ます」など、何とでも言える絵だということがわかる。

7) 正解は「知ります」で正答数 2 は、正答率は 1.6%だった。

聞きます(41) 尋ねます(27) 考えます(5) 電話(を)します(4) わ
かります(4) 問います(3) 質問します(3) 訪ねます(2)

これを見ると、女性の電話番語を知っていますかと尋ねる場面だが、「知っています」ではなく「聞きます」「尋ねます」に答えが集まった。これは、導入時に、男性の吹き出しの部分の指しながら「知っていますか」と言えば、誤解は解けるようにも思えるが、ただ絵カードを出して「知ります」というだけなら、誤解を招くであろう。

8) 正解は「できます」で正答数は 50、正答率は 40.7%だった。なお、「できません」も正答とした。

逆立ち(を)します(25) 挑戦します(9) 失敗します(5) 練習します
(5) 逆立ち(が)できます(4) 成功します(2) 頑張ります(2)

「できます」は、絵カードで導入せずとも、それ以外の導入法はいろいろとあるだろうが、正答率は、「急ぎます」に次いで高かった。(といっても約 40%だが) しかし、やはり「逆立ち」に目が行った学生も一定数いた。

9) 正解は「いります」で正答数 2 は、正答率は 1.6%だった。

旅行(を)します(68) 飛びます(9) 行きます(5) 移動します(4) 渡
ります(3) 旅します(3) 旅立ちます(3) 出張します(2)

これは、ビザのところを無視した答えが多かったためと考えられる。導入の際、ビザを指させば、上記のような誤答は防げるのではと思われる。ただ、その場合でも、「ビザを取ります」など誤答が生じる可能性がある。

10) 正解は「足ります」で正答数は、正答数 2 は、正答率は 1.6% だった。

困ります(53) 悩みます(9) 足りません(6) 分けます(4) 考えます
(4) 焦ります(3) 不足します(3) 食べます(2) 足りないです(2)
減ります(2) 消えます(2)

「足りません」「不足します」「足りないです」に「足りていません」(誤答 1)を加えると、14 名には概念が伝わっていたことになるが、合わせても 1 割強である。ここは、人数が 4 人にケーキが 3 つ、それで「1 つ足りません」なのだが、「足りません」「不足します」「足りないです」「足りていません」と否定で答えた学生には概念が伝わっていたが、多くは「困ります」「悩みます」と肯定で答えている。否定で導入しなければならないこと自体、絵カードとして問題があると言えないだろうか。

以上の結果をまとめると、以下のようになる。正答率が半数を超えたのは、形容詞、形容動詞も動詞も、それぞれ 1 つしかなかった。

形容詞、形容動詞

カードが表す語	正答数	誤答数	無答数	正答率
ハンサムだ	1	112	10	0.8%
有名だ	17	84	22	13.8%
元気だ	48	71	4	39.0%
便利だ・不便だ	3	116	4	2.4%
すてきだ	1	112	10	0.8%
楽しい	96	17	10	78%
簡単だ・複雑だ	49	50	24	39.8%
さびしい	46	70	7	37.4%
すごい	2	106	15	1.6%
大切だ	15	58	50	12.2%

動詞

カードが表す語	正答数	誤答数	無答数	正答率
習います	2	118	3	1.6%
います	5	110	8	4.1%
急ぎます	67	55	1	54.4%
教えます	34	81	8	27.6%
始めます	7	109	7	5.7%
使います	27	89	7	22.0%
知ります	2	112	9	1.6%
できます	50	67	6	40.7%
いります	2	113	8	1.6%
足ります	2	104	17	1.6%

5. 直接法における絵カードでの語彙導入

今回使用した絵カードは、『みんなの日本語初級Ⅰ』というテキストに準拠した絵カードである。(一部、『みんなの日本語初級Ⅱ』と共用) その『みんなの日本語初級Ⅰ』には、教師用の指導書があるが、その指導書(『みんなの日本語初級Ⅰ 教え方の手引』)の留意点の「語彙」のところに、以下のようにある。(2)

語彙の導入

- i. 実物、模型、写真、絵(イラスト)、ビデオ、ジェスチャーなどの利用
- ii. 翻訳(口頭、フラッシュカード)の利用
- iii. 必要な語彙リストの配布
- iv. 既習の日本語による説明
- v. 複数の方法の活用

つまり、このテキストは、語彙の導入において翻訳の使用を認めているわけであるが、翻訳・文法解説が数多くの言語で出版されている教科書⁽³⁾のため、語彙の導入において翻訳を使用するのは当然のことと言える。

しかし、同じ指導書の別のページには、このように書かれている。⁽⁴⁾

『みんなの日本語初級Ⅰ』主教材は『本冊』『翻訳・文法解説』によって構成される。語彙や文化情報を含めた各国語による『翻訳・文法解説』部分を『本冊』と分離していることは、この教科書の特徴の一つである。教師が『本冊』の内容を生かし、よく準備した教室活動をするなら、必ずしも活字による翻訳や解説を必要としない。しかし、近年の学習者の多様性と言語背景に対応し、学習者の理解を助け自習の便宜を図るためには、各国語による『翻訳・文法解説』の使用も有効である。

これを読むと、語彙の導入において翻訳の使用を勧めているながらも、しかし、『翻訳・文法解説』なしでも、つまり、直接法でも授業は可能だということになる。とすると、絵カードで語彙を導入する際も、直接法で可能、つまり、あらかじめ家で翻訳を使って予習してから授業に臨むのではなく、何の予備知識もない状態で授業中に導入で使われる絵カードを見るだけで導入が可能と言うわけである。ところが、今回、『みんなの日本語初級Ⅰ』の絵カードを検証することで、直接法では使うのが難しい絵カードが存在することがわかった。

6. おわりに

『みんなの日本語初級Ⅰ』の絵カードは、『翻訳・文法解説』とともに使えば、その効果は最大限に発揮できるものと思われる。しかし、見てきたように、直接法において、新出語の導入に使うには難しい絵カードが存在する。

これは、ほかのテキスト準拠の絵カードや『日本語を教えたい人のためのはじめての授業キット』のようなテキストに準拠していない絵カードでも同じなのではないだろうか。

つまり、従来、絵カードだけで導入できと思っていた単語の中に、絵カ

ードで導入するには難しい単語が存在しているというわけである。しかし、教師側はそれに気づかないまま、そういった絵カードで導入をしているということが日常的にあちこちで行われているのではないだろうか。

こういうと、既存の絵カードで導入して困ったことはないとの反論も出るであろう。しかし、それは、学校側が『翻訳・文法解説』を配っているからであろう。あるいは、『翻訳・文法解説』を配ってない場合も、日本語学校などの場合は、母国で勉強してから来日する学習者がほとんどで、ある程度の日本語の知識があるため、初級の、特に前半段階では、その知識で補っているのではないか。

しかし、中には、母国で日本語の勉強をせずに来日し（語学学習が目的ではなく来日した場合などはその可能性がある）、『翻訳・文法解説』などを使わない日本語教育機関で勉強している学習者もいるはずで、その状況で直接法を使って語彙の導入をしたのなら、絵カードが伝わらないことが顕在化し、そこではじめて教師は絵カードが語彙導入で使えない場合があることを知るであろうと思われる。

今回の検証は、『みんなの日本語Ⅰ』の語彙導入における絵カードに絞った検証だったが、もう少し広く、日本語教育において、初級の語彙の導入がどう行われているのか、つまり直接法か翻訳を使うか、また直接法なら、どうやって導入しているのかについて明らかにしたいと思い至った。このことについては、またあらためて言及したい。

注

- (1) ここでは、新版日本語教育事典にある「直接法とは、外国語教授法の1つで、学習者の母語や第三の言語を使わずに、学習者が学ぶ言語そのものを使って教える方法である。」との定義に従う。
- (2) 株式会社スリーエーネットワーク（2000）『みんなの日本語初級Ⅰ教え方の手引き』株式会社スリーエーネットワーク p13
- (3) 初級Ⅰで12カ国語版、初級Ⅱで11カ国語版が出版されている。
- (4) 株式会社スリーエーネットワーク（2000）『みんなの日本語初級Ⅰ教え方の手引き』株式会社スリーエーネットワーク p2

- (5)『日本語を教えたい人のためのはじめての授業キット』は、名詞、動詞、形容詞の絵カード全 483 枚からなる。

参考文献

荻原廣(2012) 「研究ノート日本語教育における初級語彙導入用動画教材の開発に関する基礎的研究」日本言語文化研究

参考教材

大森雅美, 鈴木英子, 中空芳江, 福田規子 (2008)『日本語を教えたい人のためのはじめての授業キット』アルク

株式会社スリーエーネットワーク (2000)『みんなの日本語初級Ⅰ教え方の手引き』株式会社スリーエーネットワーク

株式会社スリーエーネットワーク (2000)『みんなの日本語初級Ⅰ携帯用絵教材』株式会社スリーエーネットワーク

株式会社スリーエーネットワーク (1998)『みんなの日本語初級Ⅰ本冊』株式会社スリーエーネットワーク

(佛教大学特別任用教授)